

## 「小宇宙」

主任司祭 晴佐久 昌英

毎夏の無人島キャンプも、今年で二十一年目となった。準備や撤収を除いた島での滞在日数に限っても、延べにすると三ヵ月を超える。物好きというほかないが、間違いなく世界で最も長く無人島で暮らした司祭であろう。

小さいころから「小宇宙」が好きだった。日本庭園とか、幕の内弁当とか。大宇宙の美しさが小さな世界に秘められていることに、こよなく魅かれる。小さな星に一人で暮らす星の王子様あたりが、究極の理想である。だから、広い海にぽつんと浮かぶその島に出会った瞬間、自分が探し求めていたのはこれだと直感した。

事実、そこで暮らしていると、小さな惑星に暮らしているような安心感がある。小さくても太陽と星空がめぐり、雨が降り風が吹き、魚と草と鳥がちゃんと生態系を作っていて、全てがそろっている。神のお創りになった、汚れのない樂園。それ自体で完成している世界。

そんな世界で仲間たちと助け合いながら暮らしていると、本当に天国を実現することができそうな気がしてくる。なにしろそこでは戦争も貧困もなく、全世界の人が同じ信仰で結ばれていて、ただそこにいてだけでうれしいのだ。

その浜で、全世界の人と共にミサをする。珊瑚を積んで祭壇を作り、流木を結んで十字架を立て、波の音と海鳥の鳴き声だけが響く中、宇宙の創り主に感謝を捧げ、命の主を賛美する。これこそキリストのわざであろう。これ以上になすべきことなど、何ひとつ思いつかない。

五年前の火星大接近の夜は火星と共に捧げるミサをしたし、去年の月蝕では月と共に捧げるミサをした。来年はその海域で皆既日蝕があるので、いよいよ太陽と共に捧げるミサである。こうなると単に物好きとも言ってもらえない。人類の誰かがしなくてはならないことをしているという、壮大な使命感すら生まれてくる。

そもそも、宇宙は何のために存在するのか。そこで人が神と出会い、神の愛を知り、神に感謝と賛美を捧げる舞台として存在するのではないか。小宇宙で実現できることを、大宇宙でも実現できないはずはない。いつか必ず、人類が全員で神に感謝の祭儀を捧げる日が来る。